

『二世に聴く 在日コリアンの生活文化
—「継承」の語り』橋本みゆき（編著）
2021年，社会評論社

濱野 敏子

本書は、橋本みゆき（エスニシティ研究の日本人社会学者）、猿橋順子（異文化コミュニケーション研究の日本人社会言語学者）、高正子（在日コリアン生活史研究の在日コリアン文化人類学者）、柳蓮淑（ジェンダー、エスニシティ研究の韓国人研究者）という異なる学問的専門領域や背景を持つ4人の研究者チームによる「在日韓国・朝鮮人1世から2世への生活文化の形成及び世代間継承の研究」の調査データに基づく。朝鮮半島から移住した在日1世（以下1世）が日々の暮らしの中で育んできた生活文化はどのように他者に受け継がれていくのだろうか。この問いを明らかにするために1世のもっとも身近にいる在日2世（以下2世）に注目し、彼らのライフストーリーからアプローチしていく。

本書の構成は、序章、第一部と第二部、終章からなる。本書の意図は、生活文化という日常生活の中にある「モノ・コト」を通して、それらに関わる「ヒト」の理解にあるとする。本書は、2世の語りから見えてくるリアリティを4人の研究者の多角的な視点から光を当て、生活文化の継承を有機的かつ立体的に描いている。まず、本書の内容を理解してもらうために、構成順にその概要を紹介する。

序章では、この章の著者（橋本）が在日朝鮮人史研究会で本書のテーマについて発表した時、「こんなことが研究になるんだ」という発言が在野の研究者から飛び出したというエピソードが紹介される。生活文化はこれまで文化としてみられず、また歴史研究の対象として扱われてこなかったという。著者は、石川実の「生活文化は、生命の持続を支える活動から生まれた非継承的所産、形象的所産、制度的所産¹⁾」であり、その概念には生命維持の手段（＝必要）とより良く生きるという生命の質（＝価値）の両面が含まれる」という定義と概念内容を引用する（石川，1998）。その上で、著者は生活文化研究の意義は「生命の質」にあると述べる。なぜなら、生活の中で実践してきた「モノ・コト」には人々の思いが込められ、そこに人々の経験・実践、認識、継承という営みが見出されるからである。在日2世は、朝鮮半島の文化を身につけて移住した1世と日本の文化を一身に受けて成長する3世の繋ぎ目の位置にいる。生活文化の継承は、世代間の価値観やライフスタイルの違い、時代の変化、さらには政治や経済、国際情勢などの影響をうける。そのため単線的に受け継がれるだけで

はなく、与えられた文化への抵抗や拒否、あるいは時をへてなされる肯定的評価や感謝を伴う受容、また形式や意味の変化という場合もあり、このようなことも含めて広い視野で「継承」を捉えていくとする。

第一部は、「一人ひとりの生活ものがたり」と題して、3人の在日2世のライフストーリーと生活文化の全体像が記述される。そのうちの一つ「親として民族学級に関わって」と副題されるストーリーをここで紹介する。韓さん（女性、1949年生まれ）は済州島出身の両親のもと、大阪生野区で生まれた。父母の考え方は異なり、例えば父は女性を見下す傾向があり海女²⁾ やキーセン³⁾ を卑下したが、母は彼女らの仕事は立派な職業であると捉えていた。韓さんは向学心旺盛だったが、男児を優先する父の価値観によって兄たちには許された高校への進学を諦めた。兄たちが「日本の社会には差別がある」という話をしているとき、「家の中に（男女）差別があるやん（本文のまま）」と韓さんは思った。韓さんがいじめを受けた時、母が「差別するのは、こっちに何か問題があるんじゃないくて、その子にどこかダメなところがあるんだ」と諭したことや出自を隠していた韓さんに対して「死に、朝鮮人でないお前はいいんやから、死んだらええねん（本文のまま）」と厳しく叱ったという記憶を語る。韓さんは自身が親になって、「私のような子どもに育てたら駄目だ」と思い、民族学級の保護者を立ち上げ、自身も在日コリアンの歴史を学び、「権利」に気づき、本名を名乗るようになった。このような民族意識の変化を可能にした背景には、朝鮮のルーツを大切に生きて母の姿があった。なお、第一部の他の二つのものがたりは、「人間として堂々と生きたい」と題する盧さんと、「根を恥じないという『根っこ』』という張さんのライフストーリーである（後述）。

第二部は、「生活文化『継承』のライフストーリーからの考察」と題して、第1章から第9章からなる論考が配置される（第二部から章立てが始まる）。これらの章は、「生活文化となるモノ・コト」、「生活文化の経験と変容」、「継承が可能になるとき」というテーマ別に考察が展開され、続いて「継承」をめぐる社会的構造要因が分析される構成となっている。本項では、紙面の都合上、上記の各テーマから代表例を一つずつ紹介する。第1章の「親子間継承/非継承の語り」に現れる『民族』では、「民族文化」と呼ばれる「モノ・コト」に関連した語りの分析を通して、「生活文化」の概念整理を行っている。在日2世が語る生活文化の継承の形態や意味づけは多様であり、その表出も「継承」として認識されているとは限らず、別の文脈を通して語られたり、個人的な意義として表現されたりすることが示される。例えば、韓国・朝鮮語の継承実践が父の厳しい躰という文脈の中で語られる事例や、母の生きてきた証として意味づけられたチマチョゴリを子どもの卒業式など特別な時に着用するという事例である。ここでのポイントは、在日の「生活文化」をその「民族性」にこだわるのではなく、どのように親から子へ継承されたのか、その文脈に焦点を当てることの重要性である。

第2章の「1世・2世が食べたものとその語りかた—生活文化の経験と変容①」は、最も日常的で可視化できる生活文化実践としての食事をとりあげる。ここでは、インタビューに同席する母娘の双方の語りから、同じ食卓を有していた二人の間に経験や認識に違いがあることが示される。娘は毎日お金をもらってパンを買っていたことや家の韓国料理より外でのハンバーガーが好きだったという記憶を語り、他方の母は生計を立てるのに精一杯でとても子どもの食事に気を遣う余裕などなかったという生活のリアリティを語る。母は、食生活を後回しにしなくてはならないほどに困難であった過去の苦難を乗り越え現在に至ったことに意義を感じており、その口ぶりは自負に満ちているようだと言及する。母娘ともに当時の食生活を否定的に評価する認識は同じなのだが、娘の方は成人になって朝鮮半島の文化を学び、韓国料理の価値を再発見し、かつての母のホルモン焼きを良い味付けだったと再評価する。そして、かつては差別の対象であった韓国料理を日本で広めていきたいという希望を語る。この事例から、生活文化が時をへて当事者の価値観の変化とともに、形を変えて継承される可能性が論じられる。なお、第3章は「四国で受け継ぐ済州島S村の祖先祭祀—生活文化の経験と変容②」である。

第4章の「継承言語の働きとアイデンティティ—『継承』が可能になるとき①」では、2世にとって韓国・朝鮮語が、これまでの民族的／国家的アイデンティティの指標という位置付けから異なる意味づけを与えられて生活の中で受け継がれていることが示される。ある2世の女性は、「(同居する姑に対して)口答えなんてとんでもないよー、ほんとっ『こうせい』言ったら絶対そうするもん(本文のまま)」と語るように、姑は絶対的な存在であった。しかし、生活の中で姑の韓国語を日本語に通訳したり、片言の日本語を韓国・朝鮮語にしたる中で、姑から評価されるようになり、その関係が変化していった。女性は自分の立場をうまく調整して「従属する嫁」から、「安定した在日コリアンの嫁」へとアイデンティティを転換させていったと、著者らは解釈する。韓国・朝鮮語は、日本社会と姑の橋渡しにも貢献した。このように、韓国・朝鮮語が継承資源として、生活の中で機能していることが示される。なお、第5章は「母娘関係の振り返りと関係観の変容—『継承』が可能になるとき②(後述)」、第6章は「母の故郷、2世の『故郷』—『継承』が可能になるとき③」である。

第7章から第9章では、「継承」を規定する社会的要因について、「貧困」「ジェンダー」「世代」という側面から考察する。それぞれ重要な要因であるが、本項では第8章の「ジェンダー化された抑圧と解放」を紹介する。なぜなら、ここではジェンダー的抑圧という現象が単一的なジェンダー規範に起因する問題ではなく、様々な要因との複合的な構造の中で生じるという生活のリアリティを明らかにしているからである。日本生まれの父が朝鮮半島出身の母の朝鮮式の食方を非難する様子を見て、語り手の女性は子どもの頃には特に何も思わなかったが、大人になって母を「かわいそう」と感じるようになったという。しかし、その父の強権的な態度は、在日コリアンが日本で生きていくためには日本の作法を身につける

ことが必要という彼なりの考え方にあったことを認識するようになる。また、父のその振る舞いの背景には北朝鮮に帰国した義父が出国の際に残していく家族の保護を父に頼んでいったという事情があった。この章の著者（橋本）は、父親の家父長的権威主義を単に男性優位のジェンダー規範ということだけでなく、長男役割に縛られた父の負担や困難、日本社会の中で低位に位置づけられた朝鮮文化、さらには朝鮮半島分断による家族の離散という複合的な文脈の中で解釈する必要があると述べる。この家庭では、子どもたちが成長し民族意識に目覚めていく中で、子どもたち同士がお互いの民族名で呼び合うようになり、ついには父が母を呼ぶのも民族名になるなどの変化が起きた。親子の関係、父と母の関係が変わっていくとともに、家庭内の母の位置付けが変わり、その劣位性は揺らぎ、母が保持していた朝鮮式習慣は生活の知恵として評価され、子どもに伝授された。これらのことを、語り手である女性は「解放」という言葉で表現した。著者は、「民族」という抑圧要因が解かれたことで、ジェンダーの抑圧的作用もなくなり、生活文化継承の意義が帯びてきたと論じる。

終章では、これまでの考察が整理され、冒頭で述べられた在日コリアン1世の生活文化は「継承」されるのかという問いの答えが導かれる。「継承」の主体としての2世の語りから見えてくることは、「民族的」な生活文化とみなされる「モノ・コト」は必ずしもそのままの形で家庭生活のなかで実践されるとは限らないこと、それらは新たな意味づけを与えられて2世の人生にとってかけがえのない「モノ・コト」となって受け継がれていることである。この知見から、注目すべきは単に継承されたか否かではなく、何を持ってどんな文脈でどのように「継承」を生きたのかという生活文化の内容であるという指摘がなされる。終章の最後は、居住社会である日本もまた在日コリアンの生活文化「継承」の場であると指摘して締め括られる。

以上において、本書の概要をなるべくその機微を伝えるようにして述べてきたつもりである。以下では、本書からどのような学びを得られるのかを論じていく。本書の魅力はなんといても、ライフストーリーから引き出される多様な2世の生活世界の記述と解釈にある。ライフストーリーは、個々の経験を通してその生活世界や社会の諸相を読み解こうとする方法であり、その特徴はインタビューにおける語り手と聴き手の相互作用にあると、桜井厚は述べる（桜井、2012）。聴き手（調査者）はあるテーマを持って質問し、語り手（調査協力者）はそれに応えて過去の出来事について、〈いま、ここ〉での自分の思いや考え（過去、現在、未来について）を語り、聴き手はその生きられた世界に入って、語り手のリズムと波長に合わせて、同一化するのではなく反応していく。インタビューという場で異なる立場や経験を持つ二人の対話が始まり、その過程で語り手のライフストーリーが、歪曲されるのではなく構築されていく。このことが、ライフストーリーは語り手と聴き手の共同制作による作品と言われる所以である。

この聴き手と語り手の相互作用がとりわけ可視化される事例が、第二部第5章の「母娘関

係の振り返りと関係観の変容」である。ここでは、ある2世の女性が幼少時の体験に基づき持っていた否定的な母親像がインタビューの受け答えの中で肯定的な母親像へと転換される過程が示される。インタビューの始めでは、母について唐辛子を植えていたというように単なる事実描写として語られ、どのような母娘の関わりがあったか、あるいは母へどのような思いを持っていたかという語りが無い。そこで、聴き手は「お母さんとの関係は？」と質問を投げかけたところ、「ほとんど関わりはなかったのです」と語り始め、忙しくいつも自分に背中を向けていたという印象が語られる。しかし、成長していくにつれ母の怖く冷たい顔が優しい顔になっていったという内面の変化も語られる。一人で泣く母の姿を思い出し、厳しい環境を生き抜いた母というこれまでとは別の側面に目が向くようになり、そして「本当は物言わぬ教育をしていた」と語り、母を再評価するに至るのである。このような母親像の転換を促した契機は、上記で見たように聴き手の質問であった。それは母が変わったのではなく、語り手の変化によるものであると、この章の著者（猿橋）は解釈する。さらに言えば、この変化はインタビューの中で語り手が突然に閃いた考えではなく、以前から積み上がっていた彼女のさまざまな思いがあって、それらが聴き手の質問によって統合され、概念化され、昇華され、形となって浮かび上がってきたことなのであろうと考えられる。ここに対話の意味と重要性がある。語り手は、娘には自分のような寂しい思いをさせたくないと語り、娘と向き合う時間を大切にしているという。親子関係の様式がそのまま次世代に継承されたのではなく、自身の学びを通してより良い関係を構築するという形で「継承」が行われている。

上記の事例で見られたように、親から子どもへの「生活文化の継承」は、ある特定のモノやコト自体というよりも親の「生きてきた世界」や「生き方」を子どもがどのように捉えて評価するかにあると考えられる。このことは、本書の他の事例からも見ることができる。例えば、上述した第一部の韓さんは、在日であることを隠していた幼少時、なぜ恥ずかしがるのかと母に厳しく叱責されたことがあり、その経験が後の民族学級の活動に反映されたという。また、第一部に登場する盧さんの事例では、子どもがいじめられた時にただ黙って屈することなく、相手の日本人の家に行き（日本語の）片言で抗議した母の姿から、出自に関わらず人間として堂々と生きていくこと、朝鮮人としての誇りを持つことを教えられたと語る。つまり、「生活文化の継承」とは親の「生きる姿勢」から何かを学ぶこと、その学びを現実の生活の中で実践すること、それを自分の「生き方」として意味付けることではないかと考えられる。本書でも指摘されるように、暮らしの中の「モノ・コト」はそのまま受け継がれるとは限らず、形式が変化したり、あるいは時を経て再評価されたりという事例がより一般的である。それらの事例に通底していることは、厳しい状況を逞しく賢く生き抜いてきた在日1世（特に母親の強さは際立っている）に対する2世の信頼と尊敬、そして愛である。そこに、在日2世の生活文化の多様性・個別性と同時に共通性が見える。

さて、「継承」が多様な形や意味の中で表出されるということを本書は教えてくれるが、

この「多様性」という視点に立つとき、「継承」に関わる人との関係について、親や家族以外の人との関係はどうであろうか。例えば、第一部の張さんのライフストーリーでは、幼少時に暮らした集落の日本人住民との親密な関係や、養豚の仕事を通して形成された相互扶助的な日本人とのネットワーク、密造酒をめぐる警察官や税務署員との人情味ある交渉などが語られ、張さんが親や家族に加えてそのような隣人たちに守られ、育った様子が見て取れる。その経験は後の彼の人生観、それは父が朝鮮人で生母は日本人でありながら「朝鮮人」としての自己認識や自負や、その自負を基盤にして形成された仕事観にも影響していることが想定される。2世は1世よりも一層密接に日本社会とその文化の中に入って暮らし、将来も日本社会の中で生きていこうとする人が多い。その点で、日本人との関係は在日2世の生活文化の継承という点から、そして2世の位置を再検討するという点から重要な視点となると考えられる。この点は、本書の最後で取り上げられる『「継承の場」としての日本社会』という課題につながっていく。日本人である評者は、その「継承の場」において、在日コリアンと地域の人々がどのような関係性を持ち、共同性を形成していくのかという点に関心が向く。同じモノやコトを共有することだけでない地域社会の共同性や生活文化の継承があるのではないかと考えられるからである。この点は、今後の課題として検討していく意義が大きいと考える。

在日2世の位置について、本書は『「外国人」でもなければ『日本人』でもないという宙吊りになった「中間」を自らの起点にせざるをえない』という姜尚中の描写（姜、2016）を引用しつつ、それに留まらず、その「宙吊り」状態からいつしか折り合いをつけてどこかに着地している存在であると論じる。評者は、上記の指摘には深く同意する。その上で「着地点」について考えが広がる。本書でも指摘しているように、11人の語り手たちはすでに葛藤を乗り越えて自己を語れるようになった人たちであるが、その中には第一部の韓さんのように自分の帰属について「韓国・朝鮮」でも「日本」でもないと感じる人がいる。また、他の在日2世の中には未だ葛藤の中にいる人や、あるいは「なに人でもない」と主張する人など様々な人が存在するだろう。このように多様な「着地点」の存在が想定され、そのあり方についても今後の検討課題となるだろう。

本書で紹介された11人のライフストーリーは11の異なる「生き方」を私たち読者に教えてくれる。それは、在日でない人間が「在日コリアン二世になる」ことを可能にすることでもあるだろう。高山真は、被爆者のライフストーリー・インタビューを通して、被曝を体験していない者が「被爆者になる」ことについて、「それは被曝という現象を学ぶことではない。人（被爆者）が生きる中で出会う出来事にどう向き合い、どのように解釈し、どのように再び他者に伝達することができるか（を学ぶこと）」であると述べる（高山、2016）。評者は、11人の語りを通して、在日2世の体験をなぞらえ理解することはできないが、その思いや考えを知り、その立場を以前よりわずかでも深く広く想像することができるようになり、

それは同時に自分の位置を考えることにつながり、何よりも彼/彼女らの「生き方」を知ることによってものの見方が広まるという経験をした。このことは、他の読者にもあてはまるかもしれない。そして、その経験を他者に伝えることが「在日一世の生活文化の継承」につながり得るのではないかと考える。

本書が「在日コリアン二世の生活文化の継承」に留まらず、他の移民たちの「生活文化の継承」の研究への端緒となりそれを促進させること、そして実践の上ではニューカマーを含めた移民の「生活文化の継承」をそれぞれが暮らす地域コミュニティの中でどのように実現するかについての手がかりを提供してくれることは疑いがない。

注

- 1) 「生活文化の項目」として、具体的に以下の内容が挙げられる。1) 非継承的生活文化：土着思想、方言、生活の知恵、技能・芸能 2) 形象的生活文化：身体的継承（化粧など）、表象的継承（民謡、工芸品、道具など） 3) 制度的生活文化：身振り・ジェスチャー、行動様式（歩き方、座り方など）、慣習（食べ方、調理、食材、食器、衣類、着装、居住様式、マナー（冠婚葬祭など）、関係様式（協力、上下関係、感情表現など）要式、制度的所産の具体的な項目の例、通過儀礼、行事など）、家族内の地位配分と役割、組織化や集団の形（家族関係の形や運営など）、共同体構成の形と運営方法、集団（石川、1998）
- 2) 済州の海女（職業として潜水を行う女性）は、アワビ、ホラ貝、ナマコ、ひじきなどを海で採取して生計を立てている。済州で海女が潜水を始めた歴史は古く、6世紀の記録に国王への献上品として中央政府に真珠が送られたことが示されている。海女が海中で行う作業は「ムルジル」と呼ばれ、長年にわたる訓練と経験が必要である。8歳で泳ぎ方と潜り方を浅瀬で学び、15歳で新米の海女となる。この技能は「超人的」と見なされ、海女それぞれが海中で長時間作業することで身につけられる。（「済州の海女とは」より抜粋、2021年9月16日アクセス、<https://artsandculture.google.com/exhibit/BwIS-M5it2w0IA?hl=ja>）
- 3) 「妓生（キーセン）」とは高麗時代と朝鮮時代、宮中と地方官庁の各種宴享及び公私行事で呈材あるいは歌舞奏などを担当した伝統的な芸人を意味し、官の『妓籍（または妓案）』に登録され国家により体系的に管理された「女楽制度」として存在した。しかし、朝鮮開国以降、妓生をめぐる環境は急激に変化する。釜山港（1876年）を始めとして主要な港が開港されたことで、外国人居留地を中心に日本と清の売淫女が大量に流入し1890年代にかけて朝鮮半島の主要都市と開港場に広がっていった。1894年、日清戦争と甲午改革による「公私奴婢の廃止」が重なって生計を立てるための「娼妓」が急増、種類も多様化した。（水谷清佳、2019、「女楽を継承した芸人としての妓生像に関する研究」『東京成徳大学研究紀要 26号』より抜粋）

参考・参考文献

- 石川実、1998、「生活文化の捉え方」石川・井上忠司編『生活文化を学ぶ人のために』、世界思想社。
 姜尚中、2016、「本書の韓国に寄せて」小熊英二・高賛侑・高秀美（編）『在日二世の記憶』、集英社。

『二世に聴く 在日コリアンの生活文化―「継承」の語り』

桜井厚, 2012, 『ライフストーリー論』, 弘文堂。

高山真, 2016, 『〈被爆者になる〉 変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』, せりか書房。